

第2部

「調査をするために必要なスキル・基礎知識」

ここでは、自分で質問紙を使った研究ができるだけのスキルを身に付けましょう。第1部同様、全般に渡っての解説ということは難しいですから、私が重要だと思う点をピックアップして記していこうと思います。

このあたりの点は、読んで覚えるという性質のものではないと思います。実践を何度も繰り返し、経験知として身に付けていくものでしょう。3年生で2度程度（この授業と各ゼミで）、4年生でもできれば卒論前に1回程度経験できれば、それなりのものになってくるでしょう。特に大学院を目指す人は、これくらいはこなしておいてください。

次に、紹介する順番について記しておきましょう。ここでは、研究を計画し、質問紙法を使ってデータを集めるという流れにそって紹介するつもりです。

なお、心理学研究については数冊のよい書籍があります。最後に紹介しておきますので、いずれかを夏休み明けまでに一度目を通しておいてください。

1. 第1部で紹介した知識を再確認する

いくら経験知が重要と言っても、知識ゼロから始めるのはちょっと無謀です。第1部で紹介したもののくらいは知識としてインプットしておいてください。知識として分析方法を知らないと、分析できません。これは当たり前のことです。

2. 先行研究を読む

先行研究は、自分の研究を作り上げていくうえで必要不可欠なものです。それはなぜでしょう。

独創的なものを作りたいのだから、すでに行われた研究など見る必要はないと思っている人は考え直しておいてください。「これが本当に独創的なものかどうか」は、どうやったら判定できるでしょうか？ 簡単でしょう。以前に何が行われて何が行われていないかを知っていればいいわけです。つまり独創的なことをするためには、先行研究を知っておく必要があるのです。悪く言えば、研究の穴探しみたいなものです（ちょっと語弊がありますか）。

次に、研究は積み上げていくものです。発展とは、積み重ねがより厚さを増していくこと、といってもよいでしょう。もしこの先、10年、20年と研究をやっていくのだったら、一人でコツコツとベースから作り上げることも無理ではないでしょうが、卒論だけとかというのであれば、すでにわかっていることについてもう一度調べても、言い方は悪いかも知れませんが無駄です。それならば、すでにわかっていることを基盤として、その先に進むほうがよい

でしょう。そのためにも、先行研究についての知識が必要となります。

また批判的に読むというのも、先行研究の一つの読み方として必要です。では、ここで言う批判的に読むことのメリットは何でしょう。一つは、同じ失敗を繰り返さないため。もう一つは、言い方は悪いのですが、手っ取り早く研究をするためです。まず同じ失敗を繰り返さないための読み方ですが、山下先生（専修大学）が作られた「研究論文を読むためのマニュアル（<http://www.senshu-u.ac.jp/thm0438/journal.html>）」が参考になるでしょう。そこでは、以下の12の注意点が記されています。人のふり見て我がふり直せ、です。

1. 研究テーマや研究の意図が明確か。
2. 挙げられている先行研究は適切か。
3. 先行研究から明らかになったことが明確に指摘されているか。
4. 研究目的が、先行研究の問題点や観察などから、論理的に導き出されているか。
5. 目的や仮説が、十分焦点化され絞り切れているか。
6. 目的を明らかにするために、適切な方法が選ばれているか。
7. 研究方法が追試可能な形で示されているか。
8. 結果の示し方は適切か。適切な統計量が示されているか。事例や観察の紹介が具体的か。
9. 必要な統計的処理が、正しく行なわれているか。
10. 図・表が、適切に、また効果的に用いられているか。
11. 目的や仮説がどこまで結果によって裏付けられたか、あるいは裏付けられなかったかが、明確に示されているか。
12. 考察にきちんと根拠が示されているか。

もう一つの、手っ取り早く研究をするための読み方ではどのような点に目をつけるか、私が整理してみましょう。

1. 被験者の選出に偏りはないか。（もし偏りがあれば、まだ手がつけられていない被験者からデータを集めてみれば一つの研究になる）
2. いつデータが集められているか。（もし20年前の研究ならば、同じことをそのままに現在の被験者に繰り返せば、時代差に着目した研究になる）
3. あなた自身の観点から見て、使われている尺度は妥当か。（妥当ではないと考えられるのならば、尺度を改訂して調査を試してみれば一つの研究になる）
4. 使われている変数は必要十分か。（もし重要な変数が欠落していると考えられるのならば、その変数について調査を試してみれば一つの研究になる）

他にもありそうですが、これくらいにしておきましょう。末梢的（発展的？）研究をするのは、先行研究を批判的に読めば簡単にできそうです。付け加えておきますが、このような研究を軽んじているというわけではありません。これらも重要なのです。これらがあって、知識が積み重ねられるのですから。それを選択するか否かは、研究者の考え方次第というところでしょう。でも、初めての研究なら、このような下敷となる研究を発展させるというのも一つのやり方です。

3. 調査方法の種類を知る

調査方法にはいろいろな種類があります。まずこの種類（紹介できるのは一部であり全部ではありません）について理解しておきましょう。なぜ研究目的を決める前に方法についてなのかと思う人もいるかもしれませんが、これに答えておくと、それは、「いくらすごい研究計画を立てても、研究方法がなければ絵に描いた餅」になってしまうからです。ある意味では、研究計画は研究方法に束縛されるのです。そのため、まずどのような調査の方法があるのかを知っておくことは重要でしょう。

自由回答法

例 あなたのお母さんは、あなたが将来どんな人になって欲しいと思っているのでしょうか。どんなことでもいいですから、書いてください。

文章完成法（SCT）

例 次の文章のぬけたところに、適当な文章を入れてください。正しい答えというものはありませんから、自由に作りだしてください。

1. 私の夢は、_____。
2. 私の友達は私のことを、_____。

当然のごとく、これらの方法で得られたデータは量的な分析に向きません。尺度項目を作る際の資料を得ることを目的とした予備調査などでよく使われます。しかし、必ずしも数値的データとして扱えないわけではありません。回答カテゴリーを用意しておいて、いずれのカテゴリーにあてはまるかで数値を与えることもできます。

多肢選択法（単一選択）

例 あなたは、「人生設計」の目的として、何を最も重視しますか。どれか一つに をつけてください。

1. 自分の現在の生活を充実させること
2. 家族の現在の生活を守り、充実すること
- ：

チェックリスト法（複数選択）

例 あなたは、人生設計を始めるきっかけとなるのは、次にどのような時だと思いますか。いくつでもかまいませんので、 をつけてください。

1. 自分の進学
2. 自分の就職
3. 自分の結婚
- ：

このあたりの方法は、主に回答者をカテゴリーに分類する目的で用いられます。尺度の種類でいうと、何になるかわかりますか？ 名義尺度ですね。忘れていた人は、資料の第1部を見直しておいてください。また例としては挙げていませんが、「はい」 - 「いいえ」の二者選択をせまるような強制選択法と呼ばれる方法もあります。社会調査などでは、このような名義尺度を用いた測定がよく用いられていますが、データ処理は結構難しく（複雑に）なる傾向があります。

順位法

例 以下にいくつかの職業の性質が書いてあります。これらの性質について、あなたが一番大切だと思うものから順番に、1から5までの数字を記入してください。

- () 世間から信用される職業であること
- () 世間体のよい職業であること
- () 疲労の少ない職業であること
- () 社会のためになる職業であること
- () 自分が興味をもてる職業であること

一対比較法

例 下にいろいろな果物を対にして書いてあります。この二つの果物のうち、あなたはどちらが好きですか。好きなほうに、をつけてください。

- 1. みかん ・ バナナ
- 2. りんご ・ もも
- 3. いちご ・ みかん
- 4. バナナ ・ りんご
- ⋮

(例えば6種類の果物があれば、全てで15対になる)

これらは、どのような種類の尺度であるかわかりますね。順位尺度と呼ばれるものです。分析は、順位尺度という尺度の特性によって制限されます。方法の特徴としては、一対比較法の方が順位法よりも厳密な結果を得ることができるでしょう。しかし組み合わせの数が多くなるので、その厳密性を要求される場合や、選択肢が少ない場合に使ったほうがよいでしょう。

評定法

例 あなたが職業を選択する場合、世間体のよい職業であることをどの程度重要視しますか。あてはまる選択肢に をつけてください。

- 1. 非常に重視する
- 2. かなり重視する
- 3. 少し重視する
- 4. 重視しない

ここで最も問題となるのは、選択肢の準備でしょう。また資料第1部にあった、尺度水準のことを思い出してください。おそらく評定法を用いようとする場合の多くは、平均値を使いたいようなものなので、間隔尺度の水準のものであると思います。この水準をクリアするには、選択肢間の距離をできるだけ等しくする必要があります。「とても」「かなり」「やや」など、程度を表す言葉をどのように使って選択肢をつくるかについて考えておいてください。これには織田(1970)の研究が役立つでしょう。

あと間隔尺度に含まれ、けっこう頻繁に使われるものとしてSD法(セマンティック・ディファレンシャル法; Semantic Differential)と呼ばれるものがあります。これは測定対象に対するイメージを測定するものであり、「明るい-暗い」「かたい-やわらかい」などの形容詞対を両極に対置した評定尺度を用います。結構お目にかかることが多いので、憶えておいたほうがいいでしょう。

これまで、主な調査方法をざっと見てきました。何度も言うようですが、これが全てではありません。P-Fスタディのような投影法的な調査方法*1も質問紙の中に組み込むことができます。いろんな研究を読んでいくと、研究者がオリジナリティーを発揮して、新たな測定方法を考えているものもあることに気付くでしょう。このような方法のバリエーションについての知識を増やしておくことは、より柔軟なアプローチを可能にすると思います。

*1 投影法とは、あるあいまいな刺激に対し、どのように反応するかによって性格を把握しようとする方法の総称です。ロールシャッハテストやバウムテスト、TATなどをはじめ、文章完成法もこれに含まれます。詳しくは自分で調べてみてください。

4. 研究目的・計画を明確にする

研究をやっていて、途中で迷路に入ってしまったたり、挫折してしまう一番の原因はここにあると思います。しかしこれは、何度言われても、自分で失敗するところまで行かないと実感としてとらえられないものでもあります。だから、こちらとしても「まあ失敗すればいいじゃないの」という構えになってきています。失敗して、「目的や仮説、分析計画をあいまいにしたまま突入したからなあ」と一度反省すれば、次からは多少まともになるでしょう。

とは言っても、少しは説教も必要かと思うので、ちょっと書いておきます。まず、皆さんはこれまでに何本かの論文を読んできました。読んで理解できるようになるということが大きな目的の一つでしたが、読んできたものを手本(よい手本/悪い手本のいずれの意味も含みますが)にするという意味もあります。皆さんが読んできたもののほとんどは、仮説検証的研究*2の論文だと思います。問題を指摘し、そこに理論的に考えられる仮説を提出する。その仮説を検証するためにデータを集め、分析する。そしてその結果が、自分の仮説を支持するものか否かという検討を経て、仮説を採択するかしないかという結論に至る。とまあこんな流れだったと思います。

つまり、分析は仮説を検証するために必要十分なだけでよいということになります。ということは、分析計画は仮説にしたがうということになります。そうすると仮説をしっかり考えていないとダメということです。そんでもって仮説は、研究目的に従うので、こいつをき

ちんとしておかなければならないとなります。このように研究は一連の作業で、その中のどこか一個所で手を抜いたとしても、全体的に崩れてしまいます。こうなると後での修正は、まず効きません。では失敗したらどうするか。“やり直し”あるのみです。私は、やり直しはおおいに結構なことだと思っています。

さて、ではどの程度、研究目的、仮説、分析計画をはっきりとさせておけばいいのでしょうか。はっきりしていれば、はっきりしているほど良い、というのは当たり前です。研究の手順に従いながら解説しましょう。

*² 仮説検証的研究に相対する研究は、仮説生成的研究などと呼ばれます。仮説検証的研究は、最初に仮説ありきですが、仮説生成的研究は、研究の結果として仮説を生み出すものです。ちなみに、このように書けば、仮説検証的研究と仮説生成的研究は相互に補いあうものだということがわかってもらえると思います。方法としては、面接法や、前述の調査法の自由回答法、文章完成法などが使われることが多いです。

(1)研究目的の設定

例えば、授業中の私語について興味があるとしましょう。だから研究目的は、「私語の研究」だと言ってしまうのは、あまりにも漠然としすぎています。私語に興味があるからといって、じゃあ調査ができるかといえは、当然そうではありませんよね。もう少し目的を絞ることが必要です。私語に対する学生自身の意識が知りたいのか、私語をしてしまう理由が知りたいのか、私語を抑制する方法が知りたいのか、など自分の興味をよりはっきりとさせることが必要です。知りたい内容に対するあなた自身の個人的観点を整理すればよいのです。例えば、「自分もそうだが、悪いとは知っていながらも私語をしてしまうのは何でだろう」と思っていれば、研究目的は私語をしてしまう理由を明らかにすることになるでしょう。また教師の私語に対する注意が下手だと思い、その改善のために研究をしようと思っていれば、私語を抑制する方法についての研究となります。

ただし、研究は何をやってもいい、どのような目的を掲げてもいいというわけではありません。研究倫理という問題があります*³。真実を見極めたいからといって、調査に協力してくれる人に精神的な苦痛を与えることになってはいけません。基本的に調査への協力はボランティア精神（無償という意味ではなく、自発的という意味です）に基づいていますが、実際に行うときにはそれを十分に保証することは難しいです。このような状況であることを踏まえた配慮が必要です。生死、差別、災害・事故、いじめなどにかかわる問題は、社会的に重要なのですが、調査に協力してくれる人たちに対して十分な配慮を必要とします。

*³ 研究倫理の問題については、近年諸学会から盛んに提言がなされています。心理学の領域では、アメリカ心理学会の倫理規定を翻訳したもの（「サイコロジストのための倫理綱領および行動規範」1996 富田・深澤訳 社団法人日本心理学会）があります。教育合研に設置していますので、見ておいてください。

(2) 仮説を立てる

目的が決まってきたら、仮説について考え始めなければなりません。ここでは、私語をしてしまう理由の研究とします。仮説検証的研究では、調査に先立って、なぜ授業中に私語をしてしまうのかについての仮説を立てておく必要があります。この仮説を立てるには、これまでの研究を参考にする、自分の経験を参考にする、友だちの意見を参考にする、予備調査をして意見を集めるなどの活動をして、その結果を資料にします。ここでは、(A)授業の要因、(B)個人的人格的要因、(C)環境の要因、が主な原因だと考えたとしましょう。ここが1つの考えどころです。3つ主要な要因を原因として仮定したのですが、これらすべてを調査対象とするか、それとも一つに絞って詳しく見るか、という分かれ道なのです。

まず3つをすべて考えようとする場合、さらなる検討が必要になります。それは、この3つの要因で十分なのかということです。他に要因は無いのか、徹底的に調べましょう。つまり私語をする要因を幅広く見てみるのです。もし準備した要因リストが予備調査をした結果であれば、まあ十分ということになるでしょうが、自分で考えた場合は、周りの人の意見を聞くなどして、要因設定の妥当性を考慮しておくべきでしょう。

どれかに絞ろうとする場合も、さらに検討します。もし(A)授業の要因に絞るのであれば、それだけについてさらに突っ込んで検討します。先の研究の方向性とは少し違って、私語をする要因を授業の要因に絞って詳しく検討しようとするのです。そうすれば、a.授業内容の面白さ、b.教師の話し方、c.教材提示方法などなどが出てくるでしょう。

なお、私語をする要因を幅広く見ようとする場合にも、それぞれの要因について、さらに突っ込んだ分類をする必要がありますが、幅広くと深くを両立させることは、かなり困難な作業です。なぜなら、質問する内容が増えすぎて被験者に過剰な負担となってしまう可能性があるからです。どこかで折り合いをつけておく必要があるでしょう。

ここらあたりまできたら、仮説を整理しましょう。先の3つの要因がそれで十分であり、それらが私語に影響していると考えことにしましょう。そして、授業の要因には授業内容の面白さと教材提示方法が、人格要因には社交性と自律性が、環境要因には他の学生の私語の状況と一緒に受講する友人があると、突っ込んで考えたとします。そうすると、

- 仮説1 学生の私語には、授業の要因（授業内容の面白さ、教材提示方法）が影響している。（授業が面白いほど私語をしない・教材提示方法が上手であれば私語をしない）
- 仮説2 学生の私語には、個人的人格的要因（社交性、自律性）が影響している。（社交性が低いほうが私語をしない・自律性が高いほうが私語をしない）
- 仮説3 学生の私語には、環境の要因（他の学生の私語の状況、一緒に受講する友人）が影響している。（他の学生が私語をしないほうが私語をしない、一緒に受講する友人が少ないほうが私語をしない）

という仮説が浮上してきます。さあ、仮説ができた... というわけではありません。もう一度ここで考えましょう。学生（児童・生徒を含む）を対象とするような場合、どうしても考えておかなければならないのは、学年（年齢）の影響、性の影響、などです。学年によって影響が異なるのか、性によって影響が異なるのか、ということです。もし、性によって影響に差があると仮定するなら、

仮説4 各要因から私語への影響は、性によって異なる。

という仮説を加えなければなりません。そうすると、被験者も男女同数程度を予定する必要があるでしょう。仮説を一度考えたら（必ず書き出しておくこと）、それで十分かどうか、もう一度考えてください。

仮説を考えるとき（次の分析を考える時ですが）、言葉の使い方に注意しておいてください。特に注意が必要なのは、「関係」という言葉です。よく使う言葉で、また使い勝手もよいものですから、あまり考えることなく使ってしまう。第1部の相関係数のところで、関係の種類について書いておきました。もし「 と××は関係がある」と書きたい衝動にかられたときは、まずどの関係のことなのかを考えておいてください。第1部をよく読んで理解した人なら、「相関係数は関係性を特定せず使える指標なんだから、限定しなくても」というかもしれませんが、結局は結果の解釈を行うのですから、その時にはどうしても関係「性」について言及しなければならないことになりますので、やはり考えておかなければなりません。

さらに最大に難しいものに、「 と××の関係に が影響している」という仮説があります。これは「言うは易し行うは難し」の典型例のような仮説ですので、要注意です。「何で??」と思う人は、どういう分析をしたらこの仮説を立証できるのか、その分析方法を考えてください（先の仮説4もなかなかのくせ者です）。分析できないものは、結局は研究にならないのです。

(3)分析計画を立てる

さあ、最後の難関です。どんな分析を行ったら、自分で作った仮説が正しいといえるでしょうか。これを考える必要があります。先の仮説1から3を検討する場合を考えてみましょう。指標は全部で7つです。ずっと出てきますか?? 「私語をする程度」「授業内容の面白さ」「教材提示方法」「社交性」「自律性」「他の学生の私語の状況」「一緒に受講する友人」で、計7つです。

分析としては、まずこれらの7つの指標が使えるものであることを確認する必要があります。これには項目分析、信頼性・妥当性の確認はもちろん、もしかすれば因子分析が必要になってくるかもしれません。

では7つの指標が完成したら、次に何をするか? たしか、相関係数という統計指標がありましたね。「私語をする程度」とその他6つの指標間の相関係数を求めてみる。もし仮説が正しければ、6つの相関係数はそれぞれ有意なものだろう。これでまあ仮説が検証できたことになるでしょう。

さらに知っているはずの分析方法を使うと... 重回帰分析というのがありました。「私語をする程度」を従属変数、その他6つを独立変数として重回帰分析を行えば、6つの独立変数からの影響の順位がわかるし、もしかしたら、相関係数が有意でも、それは見掛け上のものであることがはっきりするかもしれない。

またまた共分散構造分析を使うと、授業の要因、個人の人格要因、環境の要因の3つを潜在変数として仮定することができるので、観測された6つの変数からではなく、設定した3つの要因から「私語をする程度」への影響を推定することができる。また、この因果モデルのデータへの当てはまり具合を見ることができる。（まあ、ここまでは要求しませんが）

以上のような分析の流れを考えましょう。では、仮説4についてはどうしますか？性差があると仮定するならば、各指標の得点の性差を検討し、相関・重回帰を男女別に行って、それぞれの傾向を比較検討する、といったことが考えられますね。

このように、できるだけ詳しく考えておきましょう（必ずメモしておくこと）。「そんなの考えられない」という人は、あきらめてください。この見通しが立たないまま調査をすると、データを打ち込んだ後、画面を見ながらポーっとしてしまうことになり（ほぼ間違いなくこうなります）。ですから、さっさとリタイア宣言をした方が心身の健康のためによいのです。「そんなの考えられない」けど「頑張ろうと思う」人は、十分に時間を使ってかまいませんから、腰を据えてとりかかってください。

(2)(3)+

順序的にどこに入れようかと考えたのですが、まあ、仮説・分析計画を立てる段階から考えていかなければならないことがありますので、+ としてちょっと書いておきます（ちょっとではなく、しっかりと書いておくべきかもしれない...）。それは「どのような調査方法を使うのか」ということです。

先に書いた(2)(3)の部分は、基本的に評定法を使った研究を念頭においています。当然のごとく、違う種類（水準）の尺度を用いると分析計画は変わってきます。この辺りのバリエーションは数えきれないくらいある（？）ので、全てに対応することはできません。できたとしても、したくはないです。でも、まあ1つくらい例を挙げておきましょうか。

例えば、大学時代を「専門を勉強する期間」ととらえるか、「友人関係を広げる時期」ととらえるか、「生涯で一番遊べる時期」ととらえるか、そのとらえ方によって受講態度に差が出ると仮定し、これを研究するとしましょう。この場合、大学時代のとらえ方が受講態度に影響しているという因果関係を問題にしていますから、前者を説明変数、後者を従属変数と呼ぶことにします*4。従属変数の方は、評定法で測定するのが一般的でしょうか。例えば、受講態度のよい悪いに関する複数の項目を作って、あてはまる程度で回答してもらうことによって測定する、などです。では、説明変数の方はどうしましょう？

まず、被験者を3つのとらえ方のいずれかに分類しようとするれば、多肢選択法（名義尺度ですね）を使えばよいでしょう。そうすれば、被験者を3つのうちの1つに割り当てる、つまりとらえ方の違いによって被験者を3群に分けることができます。そうすれば、1要因分散分析を使って、群間の受講態度得点の差を検討することが可能になります。

次に、順位法（順位尺度ですね）などを使って、各被験者内での順位づけを知るという方法が考えられます。ある人は、勉強、友人関係、遊びという順でとらえており、またある人は、友人関係、遊び、勉強の順でとらえているなどという差を把握することができます。もしこの順位付けで被験者を分類しようとするれば、6つの群に分けることができます。先程と同じように1要因の分散分析を用いると、群間の受講態度得点の差を検討することが可能です。また勉強を1番にあげた人、2番にあげた人、3番にあげた人で受講態度得点にどのような差があるか、などという検討もできます。なお、1番に何をあげたかによって被験者を分類すると、多肢選択法での分類と理論的には同じになりますよね。

3番目に、それぞれのとらえ方に対応する評定尺度（間隔尺度ですね）を作成し、それぞれのとらえ方に対応する得点を算出するという方法もあります。このようなデータを得た場合は、被験者それぞれが、勉強得点、友人関係得点、遊び得点を持つことになります。そうすれば相関係数を算出したり、重回帰分析を行ったりすることができます。また、各個人の

3つの尺度得点を比較することで、多肢選択法を使った場合の分類や、順位法を使った場合の分類と理論的に同じ分類をすることもできます。

簡単に3つの方法を列挙したのですが、いずれが良くていずれが悪い方法だということはありません。研究者自身が、自分の仮説にしたがって適切な方法を選択すればよいのです。ただし、知識としてこれだけは覚えておいたほうが良いかもしれません。それは、先の3つの例中にも書いたことですが、尺度水準によって分析技法が制限されること、また間隔尺度は名義尺度・順位尺度と、順位尺度は名義尺度とみなすこともできるということです。

もうちょっと尺度水準についての話をしておくと、名義尺度が最も低い水準であり、順序、間隔、比率の順で高い水準であると表現します。水準が高くなるほど数学的な操作（数値処理）に高度なものが使えるようになります。またある水準でデータを集めた場合、水準を下げることはできますが、上げることはできません（例えば間隔尺度で得た結果を名義尺度で得た結果とみなすことはできるが、その逆はできない《難しい》ということです。分かりにくければ、上の例をもう一度よく考えてください）。

このような尺度水準の特徴から、心理学ではできるだけ高い水準の尺度を使おうとする傾向があります。尺度といえば評定法（間隔尺度）というイメージがあるのは、このようなテクニカルな理由があるのです。こう書いてしまうと、「やっぱり評定法がいいんだ」と思ってしまうかもしれませんが、評定法を使うと項目数が多くなる傾向があるなどの問題が発生することも認識しておいてください。あくまでも、研究目的にそった方法（尺度水準）を用いるというのが基本です。

*4 「何で？」と思う人は、第1部の重回帰分析の部分をもう一度見直しておいてください。

5. 質問項目をつくる

さあ、質問紙作成の作業にかかりましょう。ここから先は、目的・仮説・分析計画に従って進みますから、悩んだらすぐにそこに戻れるようにしておいてください。

簡単にいうと（難しく言っても同じなのですが）、質問一つひとつが項目であり、それが冊子（一枚だけの場合もありますが）になっているものを質問紙と言います。ここでは、まず項目を作ることを、そして質問紙にまとめていくことの2段階で説明していこうと思います。

まずは質問項目作成です。これは、教示文、項目、選択肢の3つの要素から成り立っています。この3つが、ワンセットとして不整合を起こしていないことが必要です。

項目作成の第一歩は、何を測定するのかということを明確化することです。研究目的のところで、何を測定するのかということはある程度明確化しておきました。ここではさらにそれを明確化し、具体的な質問項目に置き換えていくのです。この作業では、いくつかの段階を踏んで行った方がよいと思うので、その順に記していきます。

(1) 調査方法、項目候補、教示文・選択肢の決定・作成

何を測定するのかということを明確化することは済んでいると思うので、それを具体的な文章として書き出していきます。例えば「授業内容の面白さ」を測定するのならば、どのような授業内容が面白いのか、または面白くないのかを考えながら、それを文章化していきます

す。例えば、「授業時間が短く感じられる」「自分の関心と授業内容が一致している」「授業が始まるとすぐに眠くなる」「新たな発見がない」などいろいろと出てくると思います。なおこのときは、必ず調査方法（利用する尺度水準）を踏まえながら考えてください。使いたい調査方法に見合った質問項目を考えなければならないのは、あまりにも当たり前のことですから。

ここで大切なことは、できるだけたくさんの候補を出しておくことです。もちろんこれまでの研究や、友だち、周囲の人の意見も参考にします。質問紙法（だけに限ったことではありませんが）の怖いところは、「質問しなかったこと」は「分析の対象にできない」ことです。あまりにも当たり前のことかもしれませんが、後で「あれを聞いておくべきだった」という反省が必ず出てきますので、それをできるだけ少なくしておく必要があります。ここで手抜きをしないように。

そしてある程度集まってきたら、妥当性の検討に入ります。妥当性には大きく3つの種類がありました。覚えていますか。ここで行うのは、内容的妥当性の検討です。測定したいものと自分の用意した項目内容が十分対応しているか、落としているものはないか、を確認します。そのためには、数名の仲間に自分が測定したい内容を説明し、準備した項目がそれに合致しているかどうかを判断してもらうという作業を行います。同時に、準備した項目で十分かどうか判断してもらうべきでしょう。

さらに教示文もここで設定しておきます。教示文とは、「以下の項目について、あなたはそれらがどの程度好き/嫌いですか…」などといった、どのように回答してほしいのかを書いておくもので、必ず必要です。例えば理想自己と現実自己のように、同じ項目を用意しておいて、理想での判断と、現実の判断の両方を聞くこともあります。このような操作は教示文で行いますので、誤答をまねかないように書いておくことが必要です。

なお評定法の選択肢を準備するときの注意として、両極と中央のとり方に2種類あることに気をつけておいてください。例えば「好き - 嫌い」で回答を求めたいとき、「かなり好き」「どちらかといえば好き」「どちらともいえない」「どちらかといえば嫌い」「かなり嫌い」という5段階を設定することもできますし、「すごく好き」「わりに好き」「少し好き」「全く好きではない」といった4段階を設定することもできます。先の例は、中央をニュートラルな反応として、両側に好き嫌いが展開されています。後者では、嫌いの程度は問わず、どの程度好きなのかだけに着目しています。この違いは、ちょっとした違いなのですが、分析の時には重要な意味を持ってきたりします。例えば、分析で「好き」とする群と「嫌い」とする群に被験者を分けようと思っている場合であれば、前者なら真ん中を基準に分けられますが、後者では分ける基準がありませんよね*⁵。

*⁵ 平均値を使って分けるのであればどちらでもできるのですが、その場合だと分けられた群は、「好き」とする群と「嫌い」とする群にはなりませんよね。

(2)項目候補と教示文・選択肢の整合性

ここでは、リストアップした項目候補が、設定した教示文・選択肢で回答できるかという点を確認しておきます。自分で自問自答すれば、おかしいものはすぐにわかります。

でもこういう場合もあります。「この授業を受けていて、ときどきとてもつまらなく感じることもある」という項目で、「ぴったりあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」

「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「まったくあてはまらない」という選択肢が用意したとしましょう。この項目を作った人は、「ときどき感じるんだよなあ」と思って作ったのでしょうか、「ぴったりあてはまる」がスッと選択できるでしょうか。でも「いつもつまらないんだよなあ」と思っている人は、どのように回答できるでしょうか。程度から考えると「ときどき」に「ぴったりあてはまる」よりもさらに「ぴったりあてはまる」から、「ぴったりあてはまる」に「いいか」と考える人もいるでしょう。でも「ときどき」じゃなくて「いつも」なんだから、「ときどき」と問われれば「まったくあてはまらない」と回答してもおかしくはありません。

このように項目候補と教示文・選択肢の整合性については、ある考え方をする人には整合性がある、違う考え方の人がいれば整合していないという場合もあります。特に、項目に程度の表現が入っている場合などは要注意です。このような不整合を防ぐため、何人かの人に実際に答えてもらって、答えにくいものがないかどうかをチェックする必要があります。

(3) 尺度の洗練

さあ、これで大体の形ができあがってきていると思います。最終仕上げといきましょう。これまでの作業で、少なくとも2回は、作成した項目が第三者の目に触れているはずですが、その中で、これはおかしいとか、変な表現とか言われたところについては修正してあるはずですが、まだこれできていない場合は、やってから次の作業にとりかかきましょう。また、きちんとした形でワープロ打ち出したものを手元にしたほうが作業ははかどるでしょう。

まず最初の作業は、表現チェックです。どのような調査をするにしてもチェックしておかなければならないポイントは、誘導の有無、二重否定表現、並列表現、項目形式の統一などでしょう。

誘導の有無についてのチェックは、特に教示文に着目します。ときに調査に対する熱い思いがほとばしりすぎて、教示文に不必要な記述まで入ってしまうことがあります。例えばいじめ意識の調査であれば、「学校でのいじめをなくそうとする気運が高まってきていますが…」などという文章を入れてしまうと、これは「いじめはよくないんだよ」というメッセージを暗に送っていることになります。そうすると、調査対象者は、そのメッセージを受けたうえで質問項目に答えることになります。ありのままのいじめに対する意識を調査しようとするような場合、このような構えが被験者にできてしまうことは望ましくありません。このような回答を誘導するような表現がないかどうかチェックしましょう。

次に二重否定表現ですが、「父を疎ましく感じることはないことはない」といった、否定を否定する、つまり肯定の文章表現です。ニュアンスとして二重否定でしか伝わらないものもあるかもしれませんが、わかりにくくなってしまうので避けたほうがよいでしょう。基本的に、項目表現にはわかりにくいものは使わないという姿勢がよいでしょう。

並列表現は、「おいしいものや美しいものに感動しやすい」などといった項目の表現です。これは2つの意味が入っていますよね。「おいしいものに感動しやすい」と「美しいものに感動しやすい」の2つです。人によれば、どちらも感動するものであるかもしれませんが、「おいしいもの」のには感動しやすいけど「美しいもの」では、なかなか感動しない人もいるでしょう。このように、1つの項目の中に2つ以上の質問が入ってしまうような表現は避けましょう。

最後に項目形式の統一です。基本的なところでは、語尾の統一、主語を入れるかどうかなどでしょう。「～と思う」を付けて統一するのか、基本的にそれを使わずに統一するのか。

「私は～と思う」と「私は」という主語を入れて統一するのか、「私は」は使わないのかなどの点を、各項目の内容を壊さない範囲で統一していきます。あくまでも、各項目の内容を壊さない範囲での統一なので、絶対に統一しなければならないことはありませんが、バラバラというのも変です。あと、ある項目では「母」を使い、違う項目では「お母さん」を使うなどもおかしいので修正しておきましょう。

次に、個々の研究に応じたチェックポイントを挙げておきましょう。研究目的が決まっていたら、調査をする対象の年齢や属性は決まっているはずですが、大学生用の調査を、小学生を対象に実施してもダメでしょう。ここでのポイントは、調査対象に見合った表現が使われているかどうかについてです。使っている漢字は適切か、難しい単語はないかなどを検討しておきます。なお、高校生を対象にするなら、中学生でも何とかわかる表現を選ぶといったように、基準は低め低めで設定してください。なお、ルビ（ふりかな）をふっておくのも、小学生などには必要でしょう。

表現チェックが終われば、次は内容チェックです。内容的妥当性も検討したのだからもういいじゃないかという人もいるかもしれませんが、もう一度やっておきましょう。よくやるミスは、意識についての調査だといいいながら、行動の項目が入っている場合があります。意識も行動も測定したいと意図的に考えて入れてある場合は問題ないのですが、行動の項目が1つ、あとはすべて意識の項目、などというものがあつたりします。もう一度、何を聞きたかったのかというベースにもどって考えてみましょう。

さらに、項目の類似性についても検討しておいたほうがいいでしょう。「私の家族は私のことを理解してくれていると思う」という項目と、「私の家族は私をわかってくれていると思う」という項目があったとします。あなたなら、どちらか1つにしますか、それとも両方を使いますか？ ここらあたりの判断は難しいところです。最終的な判断は、質問紙全体の項目数との関係になってきます。項目数が多すぎた場合は、極めて類似した項目はどちらかに統一する方向で作業しますし、余裕がある場合は、違う項目として両方を残しておくこととなります。とりあえず、ここでは類似性の観点から項目に目をつけておくべきでしょう。

さて、内容チェックとはちょっと外れるかもしれませんが、最後に逆転項目とダミー項目の話をしておきましょう。前に「授業内容の面白さ」を測定するために、「授業時間が短く感じられる」「自分の関心と授業内容が一致している」「授業が始まるとすぐに眠くなる」「新たな発見がない」というような項目を考えました。この4つのうち、前の2つは、測定したい内容にそった方向の項目です。反対に後ろの2つは、それを否定することが測定したい内容にそった方向である項目です。このように、聞きたいことを逆の方向から問う項目を逆転項目と言います（普通の項目は順項目と言ったりします）。逆転項目は必ず入れておかなければならない、ということはありませんが、作れるものならば入れておいたほうが良いでしょう。調査尺度は、聞きたい内容が決まっていますから、どうしても似たような項目が並んでしまうこととなります。類似した内容の項目が並んでいると、回答者の集中力が落ち、「テキトー」に回答されてしまう可能性があります。それを防ぐ意味、また回答用紙を見たときに実施者がそれに気づくヒントになるという意味で入れておくことがあります。

なお逆転項目を作るときには、かなりの注意が必要です。内容的には、その項目を否定することが聞きたいことを肯定することになるように作らなければなりません。しかし、それを否定しても肯定することにはつながらないという内容もあります。このようなものは逆転項目として適当とは言えないものですので、注意しておいてください。

次にダミー項目とは、ダミーという名前が示すように、聞きたい本来の内容とは違う項目

のことです。逆転項目と同じように、回答者の集中力が落ちることを防ぐために、気分転換的な意味で入れておくことがあります。逆転項目を作りにくいような測定内容の場合、無理に逆転項目を作らず、このダミー項目を混ぜて対処するなどの方法が考えられるでしょう。また、例えばこちらの意図が見え見えになってしまい、回答者の持つ社会的な望ましさに回答が影響を受けすぎると判断されるような場合などでは、こちらの意図を項目から推測しにくいようにするためにダミー項目を入れる場合があります。さらに暗い内容の調査のような場合など、そのような内容の項目ばかりでは回答者に精神的な負担をかけすぎてしまうかもしれません。このようなときに、少し多めにダミー項目を混ぜて、その雰囲気消すことも考えられます。ただしダミーを混ぜるとなると、当然項目数が増えることになりますので。

(4) 既成の尺度を用いるときの注意

既成の尺度があったら、便利でいいなあと思っている人は多いかもしれませんが。でも安易に使うことは勧めません、というよりも利用するには注意が必要だといっておきます。よくあるのは、測定目的が似ているからとか、自分の測定したい概念とその尺度の名称が似ているからという理由で利用を決めることです。“似ている”ということは、“同じ”ということではありません。この“似てる”と“同じ”の間にある差が、後で困ったことになる原因を作ることになります。自分が測定したかったものと実際に測定されたもの間に違いがあれば、その測定されたものを自分が測定したかったものと見なすこと自体に批判を浴びることになります。また実際に測定されたものに従って考察すれば、自分の研究意図と違うことになり、研究者自身が悩まなければならなくなります。こんなことは嫌ですから、測定目的だけではなく、項目単位でもじっくりと検討してから利用するかどうかを決めましょう。

利用することを決定した場合には、既成の項目全てを使うのか、一部を取り出して使うのかという問題が出てきます。一概にどちらがいいという判断はできないのですが、過去に行われた研究結果との比較にも触れたいと思えば全てを使う必要があるでしょう。しかし、それは関係ないというのであれば、一部を取り出して使っても構いません。時に、一部だけを使ってデータを集めて、かつ、先行研究での傾向と比較しようとする人が学生にいたりしますが、これは基本的にはできないのでよく考えてから質問項目を決定してください。

5. 質問紙に仕上げる

(1) フェイスシートの作成

質問紙の一番最初には、フェイスシートと呼ばれる部分があります。その名の通り、一枚目(表紙)の部分にあたります。ここには、調査のタイトル、説明文、調査責任者は必ず入れておきましょう。

タイトル これは、抽象的なものでも具体的なものでもかまいません。各自が適当だと思えるものをつけてください。ただ、調査内容によっては、そのままのタイトルをつけると、被験者が最初から構えてしまう場合もあります。例えば、青年期の女子は父親を毛嫌いする傾向があるのではないかと考えて調査用紙を作り、そこに「父親嫌悪意識調査」とタイトルをつけたらどうでしょう。援助交際についての意識を知りたい「援助交際容認傾向調査」なんていうのも、ちょっと構えてしまいますよね。このような場合には、もう少し和らげた表現

(例えば、「学生の父親に対する意識」など)にしておく必要があるでしょう。ただし、内容とあまりにもかけ離れたものはダメですが。また「F-D意識調査」などと、煙に巻いてしまう方法もあります。

説明文 この調査が何を意図しているのか、その重要性などについて被験者に説明し、協力をお願いするための文章です。また、回答の機密性は確保されていること、どのような回答をしてもそれによって個人が損害を被ることは無いことなども記しておくべきでしょう。なるべく思っているまを回答できるように、被験者の気持ちをもっていくためのものでもあります。なお追跡調査などの場合では、個人の回答を特定するために記名式にしたりしますが、その時にはなぜ記名式になっているのかを説明しておく必要があるでしょう。

調査責任者 この調査に関する、責任の所在を明らかにしておくものです。南山大学文学部教育学科 (氏名) などと書いておきましょう。自分のE-mailアドレスを書いておくのもいいのですが、自宅の電話番号や携帯番号はやめておきましょう。どうなってもいい人は、別に書いても構いませんが...

その他 以上は必ず必要です。あとは、個々人の研究に必要な情報を知るために項目を入れておきます。その他としては、多くの質問紙がフェイスシートに個人の属性を知るための項目を入れてあります。性別や年齢、所属、家族構成などです。でもこのときにちょっと注意が必要です。冊子の表紙は、回収や終わった後の時間に他人に見られる可能性が最も高い部分です。人に見られたくないような情報であれば、ここに置くことはやめておいたほうがいいと思います。特に、集団で実施使用と思っている場合は注意しておいてください。

(2)用紙のサイズと分量の決定

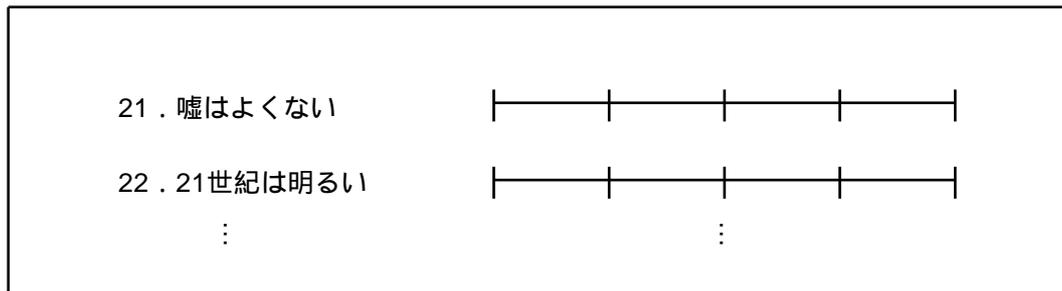
質問紙は、いくつかの項目をまとめて1冊(1枚の場合もあります)に仕上げたものです。市販されているような質問紙には、カラフルなものがあったり、両面印刷であったりしますが、我々が手作りで、しかも安上がりに作ろうとすると、そこまでのものはできません。しかし、いずれも最低限のルールみたいなものはクリアしていることが必要です。まずは、用紙サイズと分量から考えていきましょう。

まずは用紙サイズですが、印刷機材による限界もあるでしょうが、A4, A3, B5, B4などであれば何とかできるのではないのでしょうか。また両面印刷にして、見開きの形にするのか、片面印刷なのか、といったところも考えどころです。

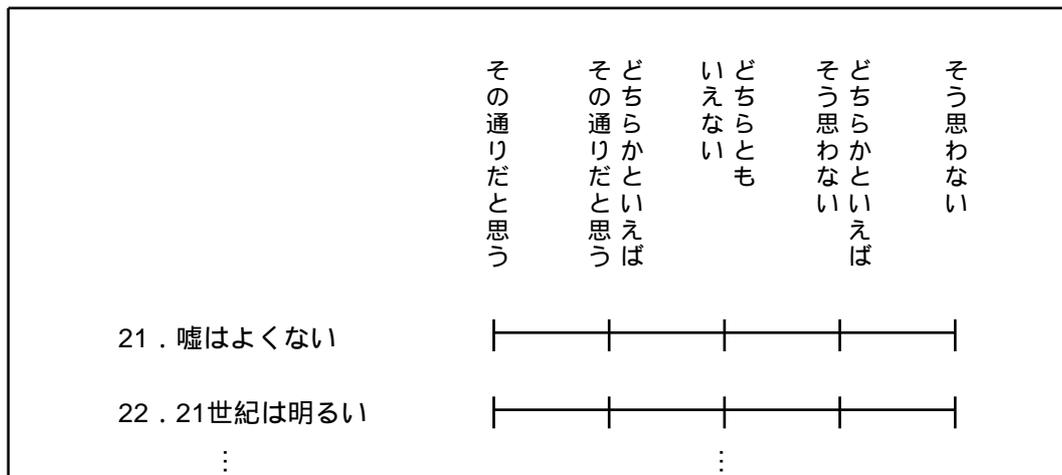
簡単な話で、用紙サイズが大きくなれば、紙面が広がるのでたくさんの項目を並べることができます。また文字を大きくすることもできますので、低年齢の子どもたちや老人を対象とする場合には良いでしょう。なお、紙面に入りきらないからといって、小さい文字を使ったり、行間をせばめることはやめましょう。回答ミスが増えるだけです。しかし、サイズが大きくなると、持ち運びや取り扱いが不便になるという面もあります。

また、時に見かけるのですが、同じ問題が複数ページにわたっている場合に、選択肢が最初のページにしかついていない場合があります。このような場合、次ページに進んでから「どうだったっけ?」と思ったとき、前のページに戻らなければなりません。そのページはそのページで完結するように作りましょう。以下の例を参考にしてください。

わかりにくい次ページ例



わかりにくくはない次ページ例



この点をはっきりさせるには、1度作ってみないとどうしようもありません。作ってみて、収まりが悪いようだったらサイズを変えてみる。試行錯誤しながら、回答しやすく美ししものを作ってください。本質とは関係ないと思いがちですが、美しさは重要です。汚い質問紙に、真剣に取り組む気になりますか？

次に分量の問題です。全部で多くても100項目以内が一般的でしょう。MMPIとかCPIといった性格検査には、数百という項目数があります。性格検査では多い項目数に理由がありますが、さらにこれらの検査は1対1に近い状況で実施されます。また、謝礼付きの調査も項目数が多い場合があります。しかし、みなさんが行うような一斉調査では、そのような多くの項目数を入れることは無理です。大学生を対象とする場合でも、70とか80項目あると、途中で飽きてしまいます。さらに小学生や老人になると、もっと少ないほうが負担にならなくてよいでしょう。また時間の問題からも分量を考えておくべきでしょう。調査を依頼した先から、15分以内でできるものならば、という条件が付けられたならば、それに合うような項目数にしなければなりません。しかし、尺度としては項目が少なすぎても問題が残ります。もし“多くしなければならぬ”場合には、2回に分けるなど考えてみてください。

項目数の決定も、最終的には実際に作ってみて、何人かの人にやってもらって、時間をかけたか、感想を聞いたりして決定せざるをえません。そんなに簡単にできるものではありませんので。

(3)その他

フェイスシートが決まって、何とか項目も決まってきたら、あとは質問の並べ方です。重要な順に並べればいいというわけではありません。普通の人には、質問紙をもらったから、最初から順に回答していきます。後ろからやる人は、まずほとんどいないでしょう。そう考えると、前の質問が後ろの回答に影響を与える可能性を否定できません。例えば、大きく2つの質問があって、前が母、後ろが父についての意識に関する質問だったとします。そうすると被験者の頭の中で、「母の時はこう回答したから、それに比べると父では…」というように、前の自分の回答を基準として後ろの回答をするかもしれないのです。こちらが期待しているのは、「母」と比べたときの「父」に対する意識ではありませんよね。もし被験者がこのように考えながら回答したとすれば、その回答は歪んでしまっているのです。

これを防ぐためには、質問の並べ方を工夫すればなんとかなります（完全に防ぐことはできませんが、歪みを少なくすることはできるという意味です）。それは、質問紙を2種類作って、項目の並べ順を変えてやるのです。質問紙のうちの半数は、「母」「父」という順にして、残りの半分は「父」「母」というものを作っておくのです。こうしておけば、すべて「母」「父」という順にした場合よりも、歪みを防ぐことができると思いませんか。

このように、質問紙に項目を配置するには、それなりの意味があるのです。また質問順に意味を強く持たせているものであれば、フェイスシートに「前から順に回答してください」などという注記を付けているものがあります。

またこのようなテクニカルな問題以外に、自然な流れというものにも注意しなければなりません。これには回答のしやすさという点から考えればよいでしょう。いきなり考え込まなければならないような問題が出てきていたり、答えたくないなあと感じるような問題からはじまると、やはりその後続けるのが嫌になるでしょう。つまり、答えやすいものから答えにくい（難しい）問題へという流れが答えてもらいやすいでしょう。

質問紙を作るときのモットーは、余計なお世話くらいに懇切丁寧なものを作ることです。特に、被験者の属性によって回答する項目が違う場合（例えば、両親と同居している場合は質問1と2、下宿の人は1と3に答えるような質問紙）には、注意が必要です。

質問紙の最後には、必ずお礼の言葉を添えておきましょう。なお質問紙をやってみた感想などを書いてもらうのも、今後の参考になります。

(4)質問紙決定のための予備調査

そんなに時間がかかるわけではないので、最終的な質問紙を決定する前に必ずやっておいてください。これまでの手順を踏み一応の質問紙ができたから、何人かにやってもらい、感想を聞くだけです。表記ミスがないかということはもちろんですが、どれくらいの時間がかかったのか、精神的負担としてはどうだったか、回答しにくいような部分はなかったかなどについても、積極的に情報を聞き、それを踏まえて最終的な質問紙を決定するべきでしょう。

6. 実施にあたって

質問紙を実施するにあたって、いくつかの注意事項があります。ひとつはサンプル、もうひとつは実施環境についてです。

(1) サンプルについて

まずサンプルの話からいきましょう。あなたは誰に調査をしようと考えていますか？ 大学生の勉学態度について研究しようと思っていれば、最も厳密に考えれば「日本全国の全ての大学に在籍する者」に調査をしなければならないということになります。まあこれは無理ですから、そこから何人かを抽出して調査をすることになります。この操作をサンプリングと言うのですが、これが現実と理想の狭間でなかなか難しい(めっちゃくちゃ難しいと言ったほうが正しいのですが)問題なのです。

例えば、大学生の勉学態度を知りたくて、南山大の文学部学生をサンプルとして調査を行ったとしましょう。その結果を大学生の勉学態度の傾向だと断定してもよいでしょうか？ まずいいですか？ じゃあ、どうすればいいのですか？ 全国の全ての大学生に調査をするのは無理でしょう。じゃあ、全国の大学の各学部から数名ずつをサンプリングすればいい？ これもかなりしんどそうです。研究できないのでしょうか？

サンプリングは、自分が研究したい対象をできるだけ十分に代表するものであることが必要です。そうであれば、まず考えなければならないことは、自分が研究したい対象とは何かです。そして、自分が言いたいことを言うために必要な対象は何かということです。もう一度始めに戻りましょう。“大学生の勉学態度を知りたい”という問題意識なら、サンプリングは全国規模で、いろいろな意味で偏りができるだけ少なくなるように配慮しなければならないでしょう。でも、大学生の勉学態度についてのある仮説を検討するためであれば、これは話しが変わってきます。

何がどう変わってくるのか。これは仮説の特性にかかわっています。もし仮説が大都市圏の大学生と地方都市の大学生で異なることが十分に考えられ、それに関する分析をするのなら、それに対応したサンプリングが必要になります。逆に、もしその可能性が理論的に考えられないのなら、サンプリングに所在地を考慮する必要はあまりないことになります。学部・学科についても同じことが言えます。つまり、サンプリングも研究の目的、仮説に影響を受けているのです。たとえ南山大学の文学部学生をサンプルとして調査を行った結果でも、その研究の目的や仮説によっては、その結果を大学生一般に般化させることも可能と考えられるのです。逆に言うと、研究の目的とサンプリングの方法によっては、結果を適応できる対象が限定されてしまうことになります。

考え方次第だからといって、安易なサンプリングを認めているわけではありません。理想と現実の狭間で、理論的にも感覚的にも納得できる、妥当なサンプリングを目指してください。

サンプルに関連してもうひとつ。人数の問題です。予備知識としてあってもいいかなと思うのは、第1部に検定というのがありましたが、検定の傾向として、人数が多ければ多いほど有意な結果が得られやすい、つまり帰無仮説が棄却されることが多くなるということがあります。じゃあ多いほうがいいじゃないか、という単純な問題でもありません。被験者数が多くなると、単純に労力を多く使わなければなりません。また有意という結果が多くなりすぎて、思ってもいなかったところで有意という結果が出てしまうことにもなります。

大体の目安ですが、研究計画によって大きく2つの決定パターンに分けられるでしょう。まず特に因子分析を行おうとする場合には、因子分析をしようとする尺度項目数の少なくとも3～5倍以上の人数がほしいところです。例えば30項目の尺度について因子分析をしようと思っていれば、少なくとも100名以上(ただし回答にミスがあるような被験者は除いてです)は欲しいところです。なぜ多くの被験者数が必要かといえ、ある程度以上の被験者数

がないと、因子分析の結果が安定してこないからです。まあこんなことを考えると、全部で100項目以下のような質問紙を行う場合は、150～200名程度の被験者数を目指せばいいのではないのでしょうか。

もうひとつは、タイプ分けを考えている研究の場合です。男女や文系理系などのタイプ分けは、前もって人数をある程度確定できるのでいいのですが、難しいのは、データをとってみないと各タイプの人数が確定しないような場合です。例えば、下宿生と自宅生の違いを考慮したい場合だと、例えば差の検定をする場合でも、下宿生が5名、自宅生が95名ではちょっと具合が悪いです。このような場合は、ある程度の下宿生数になるまでデータをさらに増やす必要があります。タイプ分けをする研究の場合は、最初から何名くらいでOKというようなことは言えないので、臨機応変に対応していく必要があります。

(2)実施環境について

次に、実施環境についての最も基本的なものとしては、被験者が落ち着いて調査に協力できるような環境が確保されているかという点の確認が必要でしょう。騒々しい場所とか、他人（調査者以外）に自分の回答をのぞき込まれることがない場所など、回答をゆがめてしまう可能性が少ない環境で実施することは確保しておきましょう。調査には実施方法もいくつかありますので、それぞれでの注意事項を書いておきます。

自分が指揮しての個別実施 時間単位の回収効率が悪く、調査者の労力は最も大きいのですが、おそらく、この場合がもっとも安全だと思います。安全というのは、調査者の意図通りに統制が可能だという意味です。基本的な環境条件さえクリアしておけば、回答が変にゆがむ可能性は少ないと思います。

もしこのような形態で調査ができたならば、被験者の回答状況をよく観察しておきましょう。楽そうにやっているのか、難しそうなのか、どれくらい時間がかかるのかなどなど、多くの情報が得られるはずですが。そのため、本格的な実施をする前にこのような個別実施を少しやっておいて、反応を見てから質問紙を再修正するという手もあります。

自分が指揮できないところでの個別実施 つまり、調査実施者を人に頼んで、第3者に個別実施をしてもらうという形態です。調査実施者の労力が大きいので、信頼できる人に頼む（できれば調査法や心理学になじみのある人が望ましいでしょう）というのが条件でしょう。

このような方法をとると、調査実施者が複数になりますので、その中での実施手順などの統一が必要になってきます。それぞれの実施者が、別々の方法・手順で行ってしまっただけでは困るのです。例えば、「これってどういう意味ですか」という質問が出た場合の対応（それを説明するのか、説明せずに回答者の判断に任せるのか）などについて統一しておかなければならないでしょう。このような統一をとるため、実施者を依頼する人には、基本的な環境の面も含めできるだけ細かい指示を示し、それを守ってもらえるようお願いしておかなければなりません。なお、調査後に実施してもらった人から、どのような様子であったかについて聞いておくことは必要でしょう。

自分が指揮しての集団実施 このような場合は、おそらく先生に頼んで時間を割いてもらい実施するというときだと思います。そこでまず、担当者に依頼を行うときの注意からいき

ましょう。そこで言うておかなければならないことは、調査の目的と実施にかかる時間です。特に実施にかかる時間については、最短ではなく、平均的な所要時間と最長の場合を告げておくべきです。OKが出たら、人数と日時を確認しておきましょう。なお、授業などの時間をわざわざ割いてもらっているということは肝に銘じておいてください。

次に準備ですが、出席予定者数よりも多少多めの用紙を持っていきます。また、調査に関する説明、実施に関する指示をしなければならないので、あわてないためにも何をしゃべるべきなのかを考えておいたほうがよいでしょう。お願い・お礼の言葉も忘れずに。なお、大きな教室では配付に時間がかかるので、助手になってくれる人を頼んでおくというのも1つの方法です。

実施中には、どのような雰囲気で行っているのかを確認するためにも、机間巡視を試してみたらよいでしょう。思わぬ質問が出ることもあります。

自分が指揮できないところでの集団実施 中学校や高校で、先生に頼んで行う場合などです。まずは、協力していただけそうな方に連絡をするところから始まります。基本的には、「自分が指揮しての集団実施」の場合で担当者に依頼をするときと同じような話しをさせてもらうことになるでしょう。このときに気をつけておいてほしいことは（まあ他の場合でもよくあることなのですが）、あなたが望む望まないにかかわらず、大学の看板をぶらさげて人に会っているということです。つまり、南山大学の、としての見られているわけです。そうすると、それに応じた言動が求められます。このような考え方に賛成できない人や自分の言動に責任を持ってない人は、大学での課題を外に持って出ないでください。あきらめましょう。なお、調査依頼書のようなものを請求されたときには、学科に所定のものがありますので、担当教官まで申し出てください。

また実際の調査用紙を持参したときには、できるだけ綿密な実施方法を説明しておいてください。書面にして渡すことが一番でしょう。実際は、実施校の都合もありますので、完全にこちらの意図通りにはいかないことが多いのですが、複数クラスでバラバラな実施がされても困りますので、できる限りのお願いをしておいてください。

最後に調査が終わった後ですが、どのような状況で行われたのか、児童・生徒の反応はどうだったのかなどについて聞いておいてください。大体の様子がわかれば、今後の参考にもなります。

その他の方法 その他の方法でよく使うものは、学生などに頼んで、その親からデータを得ることです。このような方法を選択する場合には、データの回収率がかなり少なくなることは覚悟しておかなければなりません。配った数の3～4割の回収率があれば御の字でしょう。つまり配付数は、自分が欲しいデータ数の3倍程度を考えておかなければなりません。

また、全く面識のない、関係のない、回答に責任のない人をお願いするのですから、失礼がないようにするのはもちろん、「まあ、やってやろうか」と思ってもらえるような工夫が必要になります。質問紙自体を工夫することはもちろんですが、フェイスシートとは別に、調査の必要性・重要性、意味を書いた依頼書を添付しておくという手もあります。また、回収方法も徹底しておく必要があります。郵送で回収ならば、切手を貼った封筒を添付しておく必要がありますし、仲介役を通しての回収ならば、いつどこへ出せばよいのかを指示する必要があります。なお、仲介役を通しての回収であっても、回答を第3者に見られないようにするための封筒を添付しておくほうがよいでしょう。

この他にも、持ち帰り調査や郵送調査などの方法があります。回収については、配付と回収の時間差があればあるほど回収率は下がる、実施者と被験者の関係性が薄くなればなるほど回収率は下がる傾向があります。

7. 終わりに

さて、質問紙の作成・実施については、これくらいのことを考えていれば、大失敗にはならないでしょう。成功するなんてことは、到底言えるはずがありませんが。これらのことは、私がこれまでの経験の中で、特に気をつけておいたほうがいいなあと感じたものです。最初にも言ったことですが、このようなことは読んで覚えるという性質のものではないと思います。実践を何度も繰り返し、経験知として身に付け、経験知を基に新しいものを生み出していくといった種類のものでしょう。特に新しい調査方法を考案することは、非常に面白いことです。

やれと言われた時しか、調査をしてはいけないことはありません。興がのったときにやる、というのが一番いいのかもしれない。どんどんやって、経験を積んでください。特に大学院を目指す人は、人一倍の経験を積んでおくこと。

参考文献

ぜひ読んでおいてほしいもの

原岡一馬 1990 心理学研究の方法と問題 ナカニシヤ出版 (請求番号: 361.5K/1254)

その他推薦する書籍

鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤 潤(編著) 1998 心理学マニュアル質問紙法
北大路書房

末永俊郎(編) 1987 社会心理学研究入門 東京大学出版会 (請求番号: 361.5L/1072)

続 有恒・村上英治(編) 1975 心理学研究法9 質問紙調査 東京大学出版会
(請求番号: 140/0404/v.9)

本文中で紹介したもの

織田揮準 1970 日本語の程度量表現用語に関する研究 教育心理学研究 18, 166-176.

富田正利・深澤道子(訳) 小嶋祥三・大塚英明(校閲) 1996 サイコロジストのための
倫理綱領および行動規範 社団法人日本心理学会